

# 教員免許状更新講習

## ～長期宿泊体験に生きる豊かな体験活動～

### 報 告 書

国立赤城青少年交流の家では、7月29日(火)～31日(木)、8月22日(金)～24日(日)の2回、2泊3日の日程で、教育事業「教員免許状更新講習～長期宿泊体験に生きる豊かな体験活動～」を開催した。

この事業は、小・中学校の教員が免許状の更新を行なうことと、豊かな体験活動を講義と実体験の両面から理解することを目的として開催された。参加者は、群馬県を中心として関東近県から2回共に38名の参加であった。

本事業の内容は、様々な立場の先生方からの講義を通して体験活動の重要性を理解するとともに、本所で行われている体験活動プログラムを実際に体験する実習をとおして、心身共に体験活動の必要性を実感してもらおうというものである。

<研修の様子>

#### 1日目

1日目はまず、「青少年問題と体験活動」と題した前橋市教育委員会の齊藤指導主事からの講義だった。フリップディスカッションという手法を使い、初対面で硬くなっている受講生をまずはほぐした。「不安感を和らげる効果がある。すぐに教室で実践したい。」という受講生の声も聞かれた。その後は、様々な青少年問題と体験活動が今どうして求められているのかという話が続いた。体験活動を通して得られる資質は、まさに青少年問題を解決する一つの手立てであり、その重要性を分かりやすく説明してくれた。

最後に、体験活動におけるリスクマネジメントの内容では、林間学校での自校の活動も振り返り、「参加者の実態からゆとりのあるプログラムデザインを考えたい。」「最悪の事態を想定し、対策を考える大切さが分かった。」など今後に生かせる内容であったことが伺える感想が多かった。



【講義「青少年問題と体験活動」齊藤先生の笑顔から受講生の緊張があつという間にはほどけ、体験活動の重要性に気づく素晴らしいスタートとなった。】

午後は、仲間づくりのレクリエーションを体験した。当所のあかぎアドベンチャープログラム（AAP）というプログラムから体験学習サイクルを学んだ。仲間と関わりながらアクティビティを「体験」し、体験した時に何があったかを「ふりかえり」、ふりかえた内容を「一般化」し、それをどのように生活に「適用」するかというものである。学校の全ての時間で取り入れられるもので、実践例も多く紹介されている。受講生全員が笑顔で取り組み、難しい課題には真剣な表情で話し合っている姿が見られた。アンケートでは「体験学習サイクルを取り入れた学級運営をしていきたい。」「ぜひ、子ども達にこのプログラムを体験させてあげたい。」という声が多く、指導のポイントや効果などの理解を高めることができた。



【AAPの実習。人間関係をつくる手だてや指導のポイントを体験しました。】

## 2日目

7月の午前中は、東京成徳大学の石崎一記先生より「自然体験活動と子どもの変容」という題で自然体験活動がどのような子どもの変容をもたらすのかという講義をいただいた。その後、赤城の森でネイチャーゲームを行なった。仲間と関わりながら進めていくアクティビティ、自然と関わるアクティビティを行い、「他の先生方にも紹介し、自然体験の楽しさを知ってもらいたい。」「実体験に裏打ちされたお話で納得することができた。」等の感想が聞かれ、自然体験による自らの変容を感じていた。



【講義「自然体験活動と子どもの変容」。笑顔があふれわかりやすい講義でした。】



【ネイチャーゲーム。人や自然に触れ、ゆったりとした時間が流れました。】



8月の午前中は、キープ協会の増田直広先生によるネイチャーゲームと講義であった。増田先生のアクティビティでも人との関わり、自然との関わりの中で進んでいき「五感を通じて自然と触れ合い、新たな気づきや生命尊重について学べた。」という声があった。講義では、持続発展教育（ESD）についても触れ「自然体験をとおしして持続可能な社会実現のための実践者を育てられるよう啓発していきたい。」という感想をもつ受講生もいた。



【身近な場所でもできるアクティビティを五感を使って体験しました。】

午後は、「野外炊事」の講義・実習を行った。野外炊事は当所で多く行われているプログラムで事故の危険性も他のプログラムより高い。まずは、「ねらいで野外炊事の取りませ方が違うこと。」「どのような事故が多く、何に気をつければいいのか。」という講義をした後にグループごとに実習をしてもらった。ご飯を炊くことは全グループ統一し、他の二品は選んだ食材から作るという課題にした。和気あいあいとした雰囲気の中で「仲間で見え出し合いよりよいものを作ろうと考えて行動する力が身につく」「ほんの少しのアイデアでプログラムが楽しくなる。」という感想が上がった。

また、終わった後には、実際に起きていた危険を画像で見ながら振り返った。「安全指導が危機管理能力の育成につながる。」「災害時のための体験としても必要である。」という感想が聞かれた。



【野外活動で怪我の多い野外炊事。リスクマネジメントについても考えました。】



【カレーの材料をベースにメニューをグループで考えてもらいました。】

夜は、ナイトウォークの実習を赤城自然園に出向いて行った。キャンプファイヤーやきもだめし以外の夜の活動を知りたいという声に応えるためのプログラムで、自然園の職員の方に園内を案内していただきながら、闇夜の中で「嗅覚」や「聴覚」を働かせ、普段気がつかないものに気づくようなアクティビティを行った。また、ヘイケボタルや星空を観賞し、自然の豊かさを感じる時間となった。「普段気づかない動植物のかすかな音を敏感に感じ取ることができた。」「ヘイケボタルに感動した。寝そべて星空を眺める経験を子ども達にもさせたい。」「キャンプファイヤーとは違った夜の楽しみ方を生徒に伝えたい。」など夜の自然の良さを再発見した声が多く聞かれた。



【普段は意識しない音，香り，肌触り等を闇夜の中で感じることができました。】

### 3日目

7月の午前中は、国立赤城青少年交流の家の杉浦所長より「青少年教育施設と学校の望ましい関係とは」という題での講義だった。様々な教育施設で働くことで得てきた経験を交え、体験活動の効果や学校がどのように教育施設を活用することでよりよい活動を児童生徒に提供できるかなど、クイズをいれるなどしながら話し、和やかな雰囲気の中で進んでいった。「体験活動の良さを改めて感じたので、学校現場の実態に合わせて取り入れていきたい。」「指導者の考え方一つで成果が大きく違ってくることが分かったので、実際の指導に生かしていきたい。」という声が聞かれた。体験活動で困ったことがあれば、ぜひ施設職員に相談してくださいというメッセージが込められた講義であった。



【最初の缶を探すというアクティビティのシーン。まさかという所に…】

8月の午前中は、明治大学教授 星野敏男先生の講義であった。日本で行われている林間学校の現状と課題について参加者がもっている課題意識から取り上げ、どのように今後変えていくことがより効果的なのか講習の3日間を振り返ることで考えさせた。また、アメリカの学校の活動も例として取り上げながら、ねらいによって活動や学ばせることが変わってくるという講義内容では「学校の教育目標等に対応した活動を構築し直し、新しい、効果的な取組ができないか検討することが大切。」「児童の実態から体験活動にどのような意味や意義をもたせるかはっきりさせたい。」という感想が見られた。



【自校の現状と課題をシェアしながら、講義が進んでいきました。】

最後の活動は、クラフトの実習であった。クラフト一つとっても様々なねらいで取り組むことができるという説明をし、今回は写真を見て3日間の活動の思いを共有しながらフォトフレーム作りを行ってもらった。隣の人と話しながら作成する人、創作に熱中する人など思い思いに作品を仕上げた。「実際に体験することでクラフトの良さを見直すことができた。」「最後に写真を見ながら振り返り、フォトフレームを作成する意図がわかった。」「図工と生活科を組み合わせたい。」など様々な思いを感じながら作成することができた。



【三日間をみんなで振り返りながら思い思いに作品を仕上げていきました。】

本講習は、今年で4年目を迎えた。ここ数年、「もっと多くの人を受講した方がいいので、同じ内容で年に2・3回開催できないでしょうか。」という声が多かったため、本年度は2回の開催とした。本年度も群馬県を中心に周辺の都県から申し込みがあり、すぐに定員に達したことから、需要が高いことがわかる。参加の理由も、昨年度同様参加した受講者から話を聞いてというものが多く、事前調査の内容でも現場で活用できる知識や技能を身につけたいというものが多く、少しでも自然体験活動の良さを伝えられればと身が引き締まる思いであった。

講習の構成としては、講義で体験活動の意義や必要性について理解して、実習で本所のプログラムを実際に体験してもらい技能を身につけるとともに、意図開きをしていくことでねらいを理解してもらおうようにした。講師の先生方により雰囲気をつくっていただいたことで、自然と笑顔がこぼれるような場面が多く見られた。楽しい雰囲気の中でも上記報告の感想の通り学びが多く、学校や林間学校で取り組んでみたいという意見が多くあり、本事業のねらいは達成していると感じられた。さらに詳しく学びたいという参加者もあり、11月の本所事業「自然活動指導者養成研修」に申し込んでいる。

機構本部では、「体験の風をおこそう」運動を行っているが、参加者に体験活動の重要性や効果を知ってもらい、授業等で取り入れてもらったり、本講習を受けた参加者から他の学校職員に広がっていったりするということは、児童生徒に豊かな体験活動を提供するという点で大変意味深い。今後も多くの参加者に体験活動の理解を深めるとともに、社会教育施設の活用の仕方が伝わるような事業であり続けるように工夫していくことが必要である。

担当：企画指導専門職 小川 義人